

英文和訳について

埋 橋 勇 三

1 はじめに

この小論では「英文和訳」について考えてみたいと思います。「英文和訳」と言えば、いかにも平凡ですが、英語を日本語へ翻訳するということです。本稿では「英文和訳」と「翻訳」に優劣を付けずに併用しています。英語に触れている限り、その触れ方がどのようなものであっても、英文和訳、翻訳とまったく無縁ということはないように思います。英語の意味を理解しようとするれば、日本人であれば日本語との関係が生じてきます。日本人が英語と触れた時に、その接点で起こるのが英文和訳、翻訳ではないかと考えます。この場合に、英文和訳、翻訳を非常に広い意味で使っています。英語を日本人の心に投影する時には、文章であってもなくても、意識する、しないに関わらず、英語の日本語化が行なわれているように思います。翻訳はその中の一現象にすぎません。本稿のタイトルは「英文和訳について」としましたが、単に英文和訳に留まらず、あるいは翻訳に留まらず、私たち日本人が英語を受け入れる時にはどのようにしたらよいのか。どのようなことが必要なのか。どのような態度で臨めばよいのか。このような視点から、英文和訳、翻訳について、私が、日頃、感じたり考えたりしたことについて述べています。世の中には英文和訳論、翻訳論と言うてよいものが多数存在していますが、それらを比較して、批評を加えるということはありません。そのようなことをすることは私にとって時間の無駄に思えるからです。それよりも、英文和訳、翻訳に関して書きたいことがありますので、まずはそれを書いてみたい。このような思いが勝っていました。英文和訳や翻訳に関して体系化を意図しているのではなく、英文和訳や翻訳にはどのような問題があるのかを述べています。本論が英文和訳や翻訳について考えたり、実際に行なったりする時に、何らかの刺激となればよいと思っています。最後にこの小論を書くに至った動機について触れておきます。それは、同じ英語を読んでも、どうしてこれほど読みに差が出るのかという思いでした。少々差なら我慢ができるのですが、その差があまりにも大きく、身勝手なものであると痛感することが多々ありました。これほど人により異なる読みをしていて、それをベースにしてなされる議論とは何なのか。このようなことを考えて

いるうちに、出来上がったのがこの小論です。

2 さまざまな種類の「訳」

「翻訳」の「翻」の部分にどのような文字が入るかを見ておくのも、あなたが無駄ではないと思います。ここに入る文字を見れば、「訳」の種類がわかります。ざっと数えただけで30種類以上あります。そのなかのいくつかを示します。訳の範囲を示すのが、「抄訳」、「完訳」、「全訳」です。訳し方に関するものが、「意識」、「直訳」、「逐語訳」です。ある言語からほかの言語に直すものが、「翻訳」、「国訳」、「邦訳」、「英訳」、「和訳」です。訳者に関するものが「共訳」、「拙訳」、「監訳」です。訳の質に関するものが、「名訳」、「定訳」、「適訳」、「誤訳」です。翻訳の時期に関するものとしては「初訳」、「改訳」、「新訳」、「旧訳」があります。これ以外では「反訳」、「重訳」、「音訳」があります。「反訳」は、速記録やテープなどを起こして、文字にすることです。また、訳を元の形に戻すことも「反訳」です。その意味では日本語に訳されたものを英語に戻すことも「反訳」になります。「重訳」は原典がある外国語に訳されていて、その訳書をさらに別の言語に訳することです。天保年間に天文方渋川六蔵がLindley Murrayの*English Grammar* (1795)のオランダ訳を日本語に訳しましたが、これが「重訳」です。ちなみに、渋川六蔵の訳には『英文鑑』というタイトルがついていて、日本で最初の本格的な文法書となりました。「音訳」は、英語の音に漢字をあてたものです。Clubを「倶楽部」とする類です。

3 能動的語彙と受動的語彙

能動的語彙は active vocabulary と言い、受動的語彙は passive vocabulary と言います。能動的語彙は、簡単に言えば、自由に使うことのできる語彙です。もちろん、読んでも聞いても理解できる語彙です。受動的語彙は読んだり聞いたりする時には理解できるけれど、いざ自らが使うとなると思うに任せない語彙です。英語に関して言えば、普通の日本人は能動的語彙と受動的語彙の差が大きく、受動的語彙数が能動的語彙数をかなり上回っています。日本語においても、個人の能動的語彙数と受動的語彙数の差はありますが、英語の場合ほどの差はありません。一般的に言えば、言語に関係なく能動的語彙と受動的語彙が完全に一致することはありません。なぜ、このような差が出るかと言えば、その原因の1つは、私たちの生活は読んだり聞いたりする機会の方が、書いたり話したりする機会よりはるかに多いからです。触れる機会の多い方の語彙、つまり、読んだり聞いたりして理解する語彙の方が多くなります。「口下手なの

で人前で話すのが苦手です。」とか「読むのはよいけれど書くのは苦手です。」などと言うのを、時々、耳にします。この場合に、苦手な理由はいろいろあるかもしれませんが、能動的語彙不足が原因の可能性が高いように思います。

翻訳とか英文和訳とかはある言語を別の言語に直すことですから、話すか書くかすることになります。話すのであれば、通訳ということになり、書くのであれば翻訳とか英文和訳とかになります。その際に、能動的語彙の多い方の言語に直す方が楽です。英文和訳に関して言えば、私たち日本人は日本語の能動的語彙数の割合が英語の能動的語彙数の割合より大きいので、英語を日本語に直す方が楽です。英国人であれば、英語の能動的語彙数の方が多いので、日本語を英語に直す方が楽です。私たちがロシア語をスペイン語に訳す場合はどうでしょうか。一般的に言えば、能動的語彙、受動的語彙などという前に、ロシア語、スペイン語の知識がないので、翻訳はまったく不可能です。

このように考えると、翻訳、英文和訳を行なうには日本語の能動的語彙の質と量が大きく影響してきます。もちろん、英語の理解度も重要です。英語の理解度は人によって異なります。日本語の能動的語彙の質・量も人によって異なります。その結果、2人が同じものを訳しても、同じ訳文になることはなく、それぞれ異なるものになります。全く同じものがあるとすれば、それは奇跡としか言いようがありません。ここから出て来る結論は翻訳や英文和訳は人によってそれぞれ異なるものであるということです。

このことが訳の修正に関する問題を喚起します。短い英文を日本語に訳したものを修正してほしいと言われることがあります。大袈裟な話ではなく、学生が訳文を持って来て、間違いを直してほしいと言った場合です。皆さんも同じ経験をされたことがあるのではないのでしょうか。修正できることは、日本語の主部と述部の関係が不明瞭であるとか、英文にある指示代名詞が訳されていないので意味が通らないとかいうレベルの指摘にとどまります。大きな血管が切れていると、放っておけば命に関わるので止血だけはしよう。この程度の修正は可能でしょうが、高いレベルでの修正はむずかしいように思います。仮に英語の理解度が同じであっても日本語の能動的語彙が人によって異なるために訳文が異なります。修正するくらいなら最初から自分で訳を作り直す方が楽だと感ずるのではないのでしょうか。訳文の修正はその人に成り代わらない限りできないことです。一冊の英語の本を2人で訳して、「共訳」としているのを見ることがよくあります。この2人はどのような関係なのだろうかと思ってしまいます。数人で一冊を訳す場合には、監修者がいますが、監修者はどんな思いで監修しているのでしょうか。

翻訳や英文和訳には能動的語彙、受動的語彙の問題が深く関わっています。そして、その結果として、訳文も異なってきます。突き詰めて考えると、他人の翻訳を修正することは極めて困難であると思います。

4 語彙の種類と数

英語の語彙数と日本語の語彙数には違いがあります。語彙は生活の中から作られるもので、生活習慣や文化が異なれば、語彙も必然的に異なってきます。極端な例をあげてみましょう。イヌイットにとっては、雪の状態を正確に知ることは非常に重要です。猟と雪の関係を考えてみても容易に推測できます。イヌイットには、雪を表現する言葉が50種類以上あると言われていています。彼らの50種類に及ぶ雪に対応する日本語があるかどうかは非常に疑問です。イヌイット語と日本語では語彙の種類と数が異なります。2つの言語間に全面的な対応関係が存在することはありません。したがって、翻訳をする時にはこのずれを常に頭に入れておく必要があります。英語のriverと日本語の「川」には対応関係があるように見えます。確かにriverが出てくれば、「川」と訳せば大きな問題は生じないでしょう。しかし、西洋でriverという言葉を使う時には、岸から岸まで水をたたえたような「川」を連想するのが普通ではないでしょうか。Riverと「川」の間のこのような違いはほかの語においても常に存在します。このように考えると、ほとんどの語が厳密な意味での対応関係を持っていないと言った方がよいと思います。英語と日本語の間には単純な語彙数の違いだけでなく、ニュアンスの違いなどを含めると、まったく別な言語であると言えます。英語から日本語に訳すためには、このような問題を克服して行かなければなりません。一般的に考えられているほど、英文和訳、翻訳と言ったものは簡単ではありません。英語と日本語の相違に関する相当高度な認識が必要であり、また、同時に両言語に対する寛容さも求められるように思います。厳しい見方をすれば、英文和訳や翻訳などは、身が縮むような思いを耐え忍んで、清水の舞台から飛び下りるような気持にならないとできないものかもしれません。

5 語のイメージ

翻訳で問題になるのは日本語の能力です。日本語の能力が十分でないために思うような翻訳ができない。このように言われることがよくあります。これはその通りですが、実は、日本語の能力があれば翻訳が可能かと言えば、決してそうではありません。日本語にするためには英語で書かれている内容のイメージができていなければなりません。英語のイメージが不鮮明ですと、日本語の

能力がいくらあっても、結局、ものが見えていないのですから、日本語にすることができません。一口に英語のイメージと言っても、漠然としています。まず、最初に考えるべきことは一語一語のイメージです。たとえば、decay という語を見た時に、これを「朽ちる」と訳すとしています。これ自体は間違っていない。decay を知らなくても、英和辞典を引けば、「朽ちる」、「腐る」などの訳語が出て来ます。decay を「朽ちる」と訳せば十分かと言えば、必ずしもそうではありません。重要なことは decay の訳語ではなく、イメージです。訳語よりも先に decay のイメージが目浮かぶことです。どのような状態を decay で示しているのか、それをできるだけ正確にイメージできることが重要です。このイメージができていなければ、「朽ちる」という表現が妥当であるかどうかの判断ができません。decay が出て来ても「朽ちる」という訳語が当てはまるのはごく一部に限られています。decay するのが「家」なのか、「歯」なのか、「卵」なのか、「ピアノの音」なのか。もし卵であれば、「腐る」、「悪くなる」などになければなりません。decay がどのような語と共に使われていても、すべてに共通した意味があります。decay が持っている根源的なイメージがあり、それをそれぞれの場合にあてはめて、もっとも適切な、妥当性の高い日本語に置き換えるようにします。語の根源的なイメージができていなければ、個々の場合に適切にあてはめることができません。語のイメージができていれば、decay の訳語として許される範囲がわかります。ここまでは訳語として認められるけれど、ここからは認められないという判断ができます。どの訳語が最も適切であるかを問題にする前に、どの範囲内の訳語にしなければならぬかを知ることが重要です。許容される範囲に入る訳語は必ずしも1つとは限りません。多くの場合に複数の訳語が考えられます。許容範囲の訳語であれば、どれでもかまいません。そのなかのどれを訳語として選ぶかは、訳者の感性の問題です。感性と言ってもいろいろありますが、この文脈ではあまりくだけた表現を使わない方がよい、もう少し、切れ味のある強い日本語にしたいなどという判断です。このレベルの判断は訳文の質を高めるためには絶対に必要なことですが、それ以前に、許容される訳語の範囲を語が根源的に持っているイメージから判断することがきわめて重要です。これができていなければ、訳語の適切性が判断できないからです。適切性が判断できないということは、自分の訳が正しいのか間違っているのかがわからないということになります。すると、もう訳にはならなくなります。これが訳をする時の第一歩です。実際には、この段階で躓いている場合がほとんどです。不正確なイメージ、自分勝手なイメージを作り上げて、ぼやけたイメージしか持たずに訳します。すると、ぼやけた

日本語しか出て来ません。語が次から次へと出て来ますが、すべての語に対してぼやけたイメージしかないの、ぼやけが雪だるまのように大きくなっていきます。すると、自分でも何をどう訳しているのかわからなくなります。これは避けたいことです、まずは語のイメージを正確に作り上げることが訳をする上で欠かせないことです。

6 語のイメージの作り方

語のイメージはどのようにして作ったらよいのでしょうか。日本語に関しては長く、深く接してきていますので、大体のイメージが出来上がっています。英語は外国語であり言語能力の問題もあり、日本でずっと暮らしている限り、自然とイメージが出来上がってくることはあまり期待できません。英語と長く触れ合っていると、語のイメージが作られてきますが、問題なのはそのイメージが正しいかどうかということです。英語のある語のイメージについて語るのを聞くことが、時々、あります。しかし、私が考えているものと、相当、かけ離れていると感ずることがよくあります。どうしてこんなにもイメージが違っているのだろうと思うことがあります。われわれのような外国人は自身の英語経験から自然と出来上がってくるイメージを持つだけでは不十分だと思えます。外国人であるがゆえに、イメージを作るためには、これを意識化してやらなければならないと思えます。「意識化して」というところが非常に重要です。意識化してやらないと、自分勝手なイメージをこしらえて満足することになるからです。イメージを客観的に作り上げる方法があるのかどうかわかりませんが、私自身は次のような方法で対応しています。まずは語源を調べます。ゲルマン系の語か、ラテン系の語かを確認します。ラテン系の語であれば、どのような意味で使われていたかを確認します。そして、語源の意味がそのまま現在まで持ち越されているのか。あるいは、変化してきているのか。変化してもそれは周辺的な意味の変化なのか。このようなことを知ることによって、語の生まれと育ちがある程度理解できます。これがかめたら、次にコーパスで検索して、実際にどのように使われているかを確認します。何百例も検索されることが珍しくありません。これらの例文を実際に読みます。あるいはコーパスツールを有効に使って考えます。この時に重要なのは語のイメージを作るのだという目的意識をはっきりと持ち続けることです。例文を読みながらイメージを構築して行き、また同時に修正を加えて行きます。最初はイメージがはっきりしなくても、読んで行くうちに次第に鮮明になってきます。しかし、時間をかければ、常に順調にイメージができるとは限りません。いくらやってもイメー

ジができて来ないこともあります。そういう場合には、一旦、中止して、またあとからやります。イメージを作るためには想像力が必要です。想像力が働かないときには、イメージはできあがりません。イメージができあがったら、そのイメージが正しいかどうかをもう一度例文を読みながら確認します。ほぼ間違いのないという確信を得たなら、そのイメージを文章化して保存します。余談ですが、このようにして書いたものをひとまとめにして2012年に『UZUpedia 英語語彙の生い立ちと意味 ——ことのね、ことのは——』(439頁)として書籍の形にしました。私は出版社と無縁な人間ですので公刊されていませんが、興味ある方はまだ残部がありますので、申し出てください。話を元に戻します。語のイメージを意識化して作ることはかなり時間のかかる作業で、時間をかければできるというものでもありません。想像力がないとできない作業です。時間をかけて想像力を駆使してもできるのかもわかりません。闇のまま残る語もあります。厳しい道ですが、語のイメージを作ることは、基本の基であると、日頃、自分自身に言い聞かせています。

7 文法的知識

英語には英語の規則があります。単純な規則である複数の問題を取り上げてみます。A book, books は、誰でも知っているように a book は単数ですから、「一冊の本」です。Books は複数ですから、2冊以上の本です。単数の a book は一冊の本ですが、a は常に「一」と訳せるわけではありません。「一」の意味が強くなることもあれば、ただ文法形態を整えるために a を付加するような場合もあります。また、主語の位置に来る時と目的語の位置に来る場合でも違いが生ずることがあります。a book の a をどのように訳すかは a の文法的な意味によって変わります。また、books は2冊以上であることは確かですが、3, 4冊なのか、あるいは10冊以上なのか、無限なのかなどが問題になります。この場合に books の訳をどの程度のものにするかについても、文法的な知識が必要です。for a year と for years についても同じような問題があります。for years の訳はどのような訳が適切なのか。あるいは、どの範囲の訳なら許されるのか。これらを決定するためには文法的な分析力が必要です。water と waters では、当然、意味が異なります。物質名詞の複数に関する知識が必要になります。beer と beers についても同じことが言えます。しかし、waters と beers では文法的分類が異なります。この違いをどのように訳語に反映させたらよいのか。Desire と desires も単数と複数の問題ですが、waters, beers とはまた異なる分類がされます。この違いを訳文に反映するにはどのようにしたらよいのか。a lot

of と lots of についても、単数と複数の違いがありますので、同じ訳語にはならないはずです。これをどのように処理すべきか。そのためには文法的な理解が求められます。trouser と trousers も同じです。本来であれば trousers と複数形になり、「ズボン」の意味になります。では単数の trouser はどのように訳したらよいのか。trouser と trousers が全く同じ意味だとは考えられないので、その違いをどのような日本語にしたらよいのか。the lady's room と the ladies' room でも、当然、意味が異なります。極めて単純な複数の問題でも文法的な根拠に基づいて訳語を作り上げていくことはやさしいことではありません。He died happily. と He died happy. では happily と happy の訳語の違いを出さなければなりません。happily は happy の副詞形ですから、happily には happy の要素が含まれています。「幸せ」の部分の訳語は同じですから、両者の違いは文法的な違いになります。様態副詞と疑似補語の違いを訳語に反映させなければなりません。これを両方とも「幸せに死んだ。」と訳したのでは英語の違いが日本語に反映されていないので不十分な訳と言わざるを得ません。単数と複数、様態副詞と疑似補語の例を少しだけあげましたが、このような文法的な問題は無数にあります。a kind man と a man kind は位置が違います。位置が違うということは意味も違うということなので、訳語が異なるはずですが、これは形容詞の限定用法と叙述用法の問題になります。このように考えると英語の文法規則に精通していないと十分な訳を作ることができません。文法的な意味を訳語に反映することは非常に重要なことです。内容語の意味を訳すこと、たとえば、book を「本」と訳すことは比較的簡単なことかもしれませんが、これだけでは十分な訳にはなりません。一文はいくつかの語から成り立っていますが、一文が意味を成すためにはこれらの語が合理的に並んでいなければなりません。文の規則が守られているので意味を成しています。これを文法性と言うなら、翻訳、英文和訳は目に見える語を訳すだけでは不十分であり、目に見えない文法性を訳さなければなりません。英文を和訳する上で、語と語を結び付けている目に見えないものへの意識が弱いために十分な訳語が出てこないような場合が多いように感じます。見えるものを訳すだけでなく、見えないものを訳す意識が必要ではないかと思えます。

8 情報構造

次の文を見てください。

She feared her mother.

Her mother she feared.

2つの文は使用されている語がまったく同じです。文法構造も同じで、she が主語で、feared が動詞で、her mother が目的語です。したがって、「彼女は母親を恐れていた。」という意味になります。専門的な表現を使うなら、知的意味、または概念的意味は同じです。両者の違いは語順のみです。語順が異なるということは意味も異なってくるはずですが、この違いを訳語に反映させなければなりません。そのためには情報構造に関する知識が必要になります。一文は旧情報と新情報からなり、常に旧情報が先行して、そのあとに新情報が続きます。新情報のなかでもっとも情報的な価値の高い所、つまり、聞き手にもっとも伝えたいことは文末に近い位置に置かれます。これを文末焦点(end-focus)と言います。She feared her mother. において、文末焦点となっているのは her mother の部分です。したがって、日本語訳においても her mother に焦点がくるような訳にする必要があります。「彼女が怖がっていた人は母親だった。」くらいの訳になります。これに対して、Her mother she feared. において、焦点となっているのは feared の部分です。日本語訳でも feared に焦点がくるような訳が求められます。「彼女にとって母親がどうだったかと言えば、怖かった。」くらいの訳になります。英語を日本語に置き換えて行く時に、旧情報、新情報、文末焦点の問題を意識しないと、知的意味を訳して満足してしまう危険性があります。情報構造の基本は「旧情報+新情報」ですから、訳す時にも旧情報を訳したあとに新情報を訳すことが基本となります。平たく言えば、訳は文の先頭から末尾に向かって訳す、左から右に向かって訳すこととなります。別の表現を使えば、書き手が書いた順序で訳して行くということになります。旧情報と新情報の位置関係を無視して、両者が入り乱れたような訳、文の始めと文の終わりが入り乱れたような訳は歓迎できません。その理由は一文のなかのもっとも重要な部分、聞き手に伝えたい部分が不鮮明になるからです。旧情報と新情報が入り乱れたような訳は一語一語の意味が日本語に反映されていたとしても、本当の意味で文意が伝わらないような訳になります。英文がもっとも伝えたい部分が日本語訳にも正しく反映されていることが極めて重要です。旧情報と新情報が入り乱れた訳は一文だけであれば、被害は少ないと思いますが、次から次へと続く文章になると、焦点が定まらない訳となり、訳全体が乱れたものになります。したがって、情報構造に関する理解は英文和訳に欠かせません。

9 日本語への反映

英文和訳、あるいは翻訳を行なう時に、英語が日本語のどこに吸収されたかを意識します。たとえば、downは「下」の意味ですが、必ずしも「下」という文字が入る必要はありません。根源的な意味は「下」ですから、常に「下」という文字を使えるのであれば、使う方がよいと基本的には考えます。The price is down. は、「価格が下がっている。」と訳するのがもっとも自然ですが、前後の文脈などから「価格が安くなっている。」とする方がよい日本語になることもあります。Downの意味が「安い」という部分に吸収されています。「下」という文字を直接的に使っていないけれど、「下」の意味が反映されていることを確認することが必要です。英文の意味が直接的に日本語に置き換えられることが多いのですが、この場合には直接的に日本語と入れ替わったこととなります。しかし、置き換える、入れ替えるというレベルまで達していないことがあります。置き換えようとしても置き換えられないことがあります。その場合には、反映することが必要になります。これは語に限ったことではなく、それよりも大きな単位においても言えることです。英文は受動態になっているけれど、受動態をそのまま日本語に置き換えることがむずかしいことがあります。この場合には受動態以外の日本語、たとえば、能動態の日本語などにしますが、その際に、英語の受動態の意味がどこかに反映されていることが望ましい。

英語を日本語に訳す場合に、置き換える場合と反映させる場合があると考えます。置き換える場合の顕著な例は固有名詞です。翻訳の中でもっとも訳の差が出にくい部分が固有名詞です。抽象名詞は簡単ではありませんが、それ以外の名詞は比較的置き換えが効きやすい部分です。名詞以外は置き換えが効く場合もあれば、効かない場合もあります。置き換えができない場合には反映させることとなります。一文の意味をコップ一杯の水にたとえてみましょう。コップ一杯の英語があるとします。それを同じ大きさの日本語のコップに入れたら、英語と同じようにちょうど一杯になるようにします。日本語のコップのなかには置き換えられている部分と反映されている部分が入っています。置き換えた部分のみでコップを満たそうとすると、コップからあふれ出たり、あるいは八分目までしか満たされなかつたりします。ちょうど、一杯にするためには反映させる作業が必要になります。反映させることにより、でこぼこ感がなくなり、自然な雰囲気が出て来るようになります。英文和訳や翻訳は置き換えと反映から成り立っていると言えます。置き換えは比較的簡単にできますが、反映はむずかしい面があります。翻訳の良し悪しを左右するのはこの反映の部分であると考えています。

10 和語と漢語

日本語は和語と漢語から成り立っています。和語だけの文、漢語だけの文は、通常、ありません。日本語を書く時に、和語を多く使う人もいれば、漢語を多く使う人もいます。英語を日本語に訳したのも、当然、日本語になります。すると、和語と漢語の割合が問題になります。House は、「家（いえ）」と訓読みで訳すとやわらかい感じの訳になります。「住処、住家」はいずれも「すみか」と読みますので、やはり、やわらかい感じの訳になります。「家屋、住居、住宅」は音読みで「かおく、じゅうきょ、じゅうたく」となり、漢字2文字ですから、固い感じの訳になります。英語の語彙は大きく分けると、ゲルマン系の語とラテン系の語になります。ゲルマン系の語は短くて、日常的に使われる語が多く、ラテン系の語は長くて、書き言葉で使われる語が多い傾向にあります。また、別の表現を使えば、ゲルマン系の語は易しい語、和語で表せる語で、ラテン系の語はむずかしい語、漢字2文字で表せるような語ということになります。英文の中に占めるゲルマン系の語とラテン系の語の割合を感じとり、ラテン系の語が多く含まれている文には漢字を多く入れるようにします。ゲルマン系の語が多ければ、日常的なやさしい語を多く入れるようにします。ラテン系の語が多く含まれている文が、くだけた日常的な雰囲気の間になることは通常ありません。ラテン系の語を多く含む文はその内容が非日常的で、学問的なものになりがちです。英語を翻訳する時には基本的にこのことを押さえておく必要があります。house のようなゲルマン系の語であっても、「家屋、住居」などのように音読みの訳語を与えることができます。consider のようにラテン系の語であっても、「熟慮する」のような音読みの訳ではなく、「よく考える」のように訓読みの訳にすることができます。一般論として言えることは、英語のすべての語はやわらかい和語訳と固い漢語訳の両方が可能です。和語訳は読みやすく理解しやすく、やわらかくなり、漢語訳は読みにくく理解がむずかしく、固いものになります。「人が暮らす家」と訳すか、「住居」と訳すかという選択を常に迫られます。「住居」の方が、締まりがあり、切れ味もあります。「人が暮らす家」はわかりやすいですが、いかにも平凡な感じがします。

和語、つまり、ここでは訓読みができる語という意味ですが、できれば和語を多めに入れて訳す方がよいと思います。和語を多めに入れるためには、英語の意味を本当によく理解していないとできません。英語の意味が理解できていないと、英語を噛み砕くことができません。ラテン系の語はむずかしい、固い語が多いと言いましたが、ラテン系の語も噛み砕くことができます。ラテン系の語が最初からむずかしい印象を持っていたわけではありません。ラテン系の

語も最初はゲルマン系の語と同じように日常的なやさしい語でしたが、語と語が結合して新たな語を作るようになりました。ラテン系の多くの語が複数の概念から成り立っている語であるために、表わす意味がむずかしくなったのです。ラテン系の語の多くは、したがって、分解すること、ほぐすことができます。ほぐされたものは和語で表現できます。すべての言語のすべての語が日常生活から生まれたものと私は考えていますので、すべての言語のすべての語は日常生活のレベルまでほぐすことができると考えています。したがって、すべての訳は大和言葉で表現できると考えています。

漢語を多く入れた訳語は威圧感を示すには効果的ですが、できた日本語が曖昧になりがちです。少し露骨な表現を使えば、漢語を使えばごまかしが効くということです。私が見る限り、訳文を読んでいて変だと感ずる部分は、ほとんど漢語の部分です。逆に言えば、自分が訳をしておかしいと感じたならば、漢語の部分を和語に置き換えることをやってみるのがよいと思います。おそらく、今まで見えていなかったものが見えてくるのではないのでしょうか。

翻訳をする時に、和語と漢語のバランスをいろいろな意味で考えてみることは意義のあることだと思います。和語だけ、漢語だけの訳文はできませんので、どのような割合で混ぜ合わせるかが重要になってきます。英文の内容をよく理解するためには和語が必要であり、これを圧縮して、すっきりした切れ味を出すためには漢語が必要になります。和語と漢語のバランスをどのように考えるかが、翻訳する人にとっては大切になります。漢語を使う時には注意する必要があり、和語の意味を正確にコンパクトにまとめるために使うことが重要です。和語で表現できないものは漢語でも表現できないということです。

上に述べたことを意識化して翻訳していたのでは、翻訳が進みません。よく説明できないある種の感覚に基づいて訳をすることになります。この「感覚」は固有のものですが、絶対的なものではありません。漢字を多く入れれば入れるほどよいと思い込んでいる人がかなりいるように思います。漢字を使わなければならない理由を考えてみることも必要ではないかと思っています。

11 英和辞典の日本語

英文和訳、翻訳をする時に英和辞典を使います。意味のわからない語がある時に引くのが辞書ですが、まったくわからない語を引く場合とわかっているけれど引く場合があります。この2つの引き方には大きな違いがあります。わからなくて引く場合は辞書の引き方が受動的になります。こちらにわからない語に関する知識がないので、どのような意味かを全面的に教えてもらうことにな

ります。まったくわからない語の場合には注意が必要です。何分にもその語に関する知識がないので、辞書に書かれている意味を採用する時に、分別とか常識が効かないことがあります。たとえば、英語圏の文化が深く関与しているにもかかわらず、その文化に関する知識が乏しいために、意味を採用しても実質が伴わない。ただ、英和辞典の訳語を運んでくるだけで、訳者の体を通していない。このような場合には、時折、とんでもない場違いの訳をつけてしまうことがあります。自分自身と関わりがなく、ただ、英和辞典の意味を借用しただけの場合です。このような語が一文中に複数あると、文脈からの判断がかなりむずかしくなります。このような語に出合った場合には受動的になり、ただ受け入れるだけになります。これは避けなければならないことです。一旦、立ち止まってその語を十分に理解するための時間が必要です。ただ、受け入れるのではなく納得できるまで付き合う必要があります。訳された日本文の中に責任を持つことができない日本語が一語たりともあってはなりません。すべての日本語に責任を持つべきです。英和辞典に載っているからということとは理由にはなりません。訳者自身の日本語に関しては訳者自身が責任を持たなければなりません。

もう1つの辞書の引き方があります。英文を読んでいて、語のイメージが十分にできている、語の意味が見えている場合です。ただ、わからないのは見えているものをどのような日本語にしたらよいかは浮かんでこない。このような時には、わからないから、意味を知りたいから引いているのではなく、自分のイメージと合う日本語を探しているだけです。イメージを正確に日本語化していくことが英文和訳ですが、日本語のボキャブラリーが常に十分とは限りません。そんな時に、ボキャブラリー不足を補うために英和辞典を引きます。英語の意味はすでにわかっているのに、英和辞典を一種の国語辞典として使っています。このような場合には、間違った意味を採用することはありません。英和辞典を引いてもイメージにぴったりと合う日本語が見つからない時には、自分で考えるしかありません。時々やることですが、イメージを人に説明して、「あなたなら、このイメージをどのような日本語で表現しますか。」と尋ねてみることもあります。

英和辞典を引く時には語の意味を知らないから引く受動的な引き方と、語の意味はわかっているけれど、適切な日本語の持ち合わせがないので何かいいものはありませんかと言って引く能動的な場合があります。辞書を引く姿勢が両者の間ではまったく異なっています。

12 コーパス

コーパスは言語学研究のために集められた言語事実の集積です。コーパスと
言えば、言語研究との連想が強いのですが、言葉に関することをやる時には、
たとえ、それが何であっても、非常に有効です。まだ、コーパスが話題になる
前から、コーパスの必要性を私は強く意識していました。かなりの時間を割い
て、コーパスの構築に努めて来ました。その結果、現在、1億2千万語からな
るコーパスができています。コーパスの中に入れる英語はなるべく多くの分野・
領域のものを入れるように意識的に努力しました。完全にバランスが取れた
コーパスになっているとは言えませんが、自分の好みに偏らないように、常に
意識しました。私の現在の生活はこのコーパスと密着して営まれています。ま
ずは、コーパスを開き、すぐに検索できる状態にしています。わからないこと、
疑問に思うことがあれば、まず、このコーパスに当たります。あらゆる種類の
情報の一大宝庫であり、私の伴侶となっています。世界には BNC, BoE, Time
Corpus など多様なコーパスが存在していますが、これらのコーパスに行く前
に、私自身が長い時間をかけて、おそらく30年くらいを使って構築したコー
パスにまずは行きます。このコーパスは私の生活の中に完全に溶け込んでいる
コーパスです。

英文和訳、翻訳を行なう上でもコーパスは非常に役立ちます。役立つという
よりは、なくてはならないものです。コーパスの有用性はあまりにも大きく、
また、幅広く、とても一言で言いつくせるものではありません。ほんの一例
をあげてみましょう。Ravine という語をどのような日本語にしたらよいのか。
訳語はどの範囲の訳語にならなければいけないのか。なぜ、valley や vale や
draw ではなく、ravine という語を使っているのか。このようなことがわからな
いと ravine の適切な訳語が出て来ません。コーパスで ravine を検索すると多く
の例文が出て来ます。その1つ1つを読むことによって、辞書などではわから
ない ravine の姿が見えてきます。どのような場所にあり、人々がどのように認
識しているのか、川との連想はどのようになっているのか、比喩的な意味で使
うとするならその意図は何か。検索された例文を1つ1つ読むことによって、
ravine という語の生態、現実の世界における位置づけを生々しく捉えることが
できます。表側からも裏側からも ravine の実態を、コーパスを読むことによって
描くことができます。Narrow, deep, steep などと極めて強い連想を ravine が持つ
ていることがわかります。水との関係はもっとも重要な要素です。単に ravine
とあっても、時には狭い谷、峡谷と訳すことも許されるし、峻険な谷と訳すこ
とも許されることがわかります。コーパスを使うことによって、ravine にはど

のような訳が適切なかを判断することが可能になります。今、あげたのは語の意味ですが、そのほかにもありとあらゆる機会にコーパスの助けをかります。なぜ、the でなく a を使っているのか。この違いを訳語にどのように反映すべきか。Slowly が文頭に位置しているけれど、文尾の時とどのように違うのか。この違いを訳語にどのように反映すべきか。Must ではなく have to が使われているけれど、have to を使っている理由はなぜか。そして、これを訳語にどのように反映すべきか。また、どの程度の強さの訳語にすべきか。

コーパスは英文和訳、翻訳をやる上で、無限の支えとなってくれる可能性があります。何百回、何千回と検索を続けて行くうちに、より効果的にコーパスの可能性を引き出すことができるようになります。大袈裟に言えば、言葉の宇宙が見えてくる気がします。より正確な、包み込むような、余裕のある日本語を引き出してくれます。

13 訳読式授業

「訳読」は英語を日本語に訳しながら英語を読むことです。目的は英語を読むことですが、より理解しやすいように自国語である日本語に直しながら読むことです。日本では伝統的に訳読式授業が行なわれてきました。しかし、最近では会話式授業が圧倒的に多くなっています。訳読式は確かに主流ではなくなくなっていますが、授業中のすべての時間とまではいかななくても、訳読は行なわれています。訳読とまではいかななくても、英語を日本語に訳すことが行なわれています。学生が日本人である以上、訳読の形態は異なっても訳読に類するものが行なわれています。

実際の授業では、文構造を押さえて、主語を特定して、助詞の「が」、または「は」を添えます。次に動詞とその目的語を添えて、文を完成させます。修飾語句があれば、それがどの部分を修飾しているかを説明します。完了形になっていれば、完了形の意味を訳語に反映させます。これに類することを行ないながら、なんとか意味の取れる日本語にします。ここまでできればよしとして、次の文の訳に移ります。

教師はこのような授業を毎時間、毎時間繰り返しています。私が問題にしたのはこのような授業を続けていれば、当然、教師の英文和訳の力がついてくるはずなのに、現実にはどうもそのようなようになっていないらしいということです。文法の授業を何年も続けていれば、文法の力がついてきます。英作文でも英会話でも何年も教えていれば、少しずつであっても書く力、話す力が身につけてきます。しかし、英文和訳に関しては事情が違うように思えます。英文和訳の

授業を長く続けている教師がその年数に応じた英文和訳の力をつけているかといえば、そのような人はほとんど見かけないように思います。極端なことを言えば、最初の時と力がほとんど変わらない。こんなケースが多いように思います。英文法の力がついて来ていると感ずる教師はたくさんいると思いますが、英文和訳力がついていることを実感する教師は少ないように思います。私自身はそのような感想を聞いた記憶がありません。人の訳の非を指摘する人はたくさんいます。ほとんどすべての人が非を指摘できるのではないかと思うほど、大勢います。非を指摘できるからと言って、その人に翻訳の能力、英文和訳の能力があるとは限りません。部分的に非を指摘できることと翻訳の能力があることは全くの別物であると私は思っています。もっとも問題なのは翻訳の能力が伸びていることを実感できないということです。このことは英文和訳、翻訳が学べるもの、学んで身につけることのできるものであるかどうかということの意味します。そして、学べないものであるとするなら、それは教えることもできないことになります。もし学べるものであるとするなら、その方法論があるはずですが、この本を読めば、翻訳の力がつくというようなものはない気がします。6ヶ月かけて、『翻訳の手引き』という本を読んでマスターしたから、もう、翻訳に関しては大丈夫だ。このように言える本がないように思います。このように考えると、英文和訳、翻訳というものは学ぶことのできないもの、教えることのできないものであるとの結論に至らざるを得ません。この結論は、教師と学生が英文和訳の授業にいくら時間をかけても成果があがらないという事実を裏付けるには好都合です。

なぜ、学べないのか、教えられないのか、その理由についてはまだ不明です。私が、今、考えていることは、英文和訳、翻訳という作業には音声、文法、語の知識、情報構造、文化、歴史、心理、美意識などあまりにも多くの事柄が関与しているからではないかということです。したがって、訳す人にはこれらの要素を自分の感性によって1つにまとめ上げることが求められます。ばらばらに関与しているものを1つにまとめあげる感性と能力が求められます。文法的には正しいけれど、日本語としては読めない。日本語としては読めるけれど、文法的知識が弱いために自分勝手な訳文になっている。ほぼすべての点において、合格点に達しているけれど、まとめ上げる感性が焦点ボケしているのだから、読んでも文章に力がなく、拍子抜けしたものになっている。英文和訳の授業でやっていることは、和訳に関わる多くの要素の内の一部に触れているだけで、本当の意味での英文和訳にはなっていない。学ぶ側も教える側も一部のみに触れているにすぎない。本当の意味での英文和訳、翻訳は上に述べたようなすべ

てのものを訳者の感性で1つに統一して日本語にすることなので、これを授業でやることは不可能であると私は考えています。

14 訳の評価

翻訳にはその良し悪しが必ずあります。良い翻訳と悪い翻訳をどのように見極めるのでしょうか。一冊の翻訳書を読んで、良いという人もいれば悪いという人もいます。評価の基準を細かく設定して、基準に適合しているかどうかを判断する方法もあると思います。このような方法は、一見、合理的に見えますが、どこか分別に欠けているように思います。たとえば、評価基準の中に文構造を正しく捉えているかどうかということがあるとします。もっと具体的に言えば、主語、動詞、目的語を正確に捉えているかどうかというようなことです。この評価基準を満たしていれば、この点ではよい訳だということになります。しかし、S+V+Oの文構造を訳す時に、「SがOをVした」のような訳に必ずしもなるとは限りません。むしろ、そのように訳した場合には不自然な日本語になることがしばしばあります。文構造ばかりでなく、そのほかにも無数にあると言ってよいほどの評価基準を立てることができます。これらの1つずつを丁寧に点検して、翻訳の良し悪しを決定することは、やはり、不自然であると思います。

私の考えでは翻訳の良し悪しは一瞬のうちに決まるものだと考えています。一瞬と言っても、それは文字通りの一瞬ではないかもしれませんが、少し読めばその翻訳がどの程度のものであるかがわかるとと思います。私の評価基準は自然に読める日本語、楽しめる日本語、英語の臭みが消えた日本語であると私自身が感ずるか否かということです。日本語として納得のできる読み方ができるかどうかで決まります。訳の良し悪しを判断するのに英語で書かれた原典を見てみないとわからないという人もいます。これも、一見、合理的な意見に聞こえますが、やはり、どこか分別に欠けているように思います。英語を日本語に翻訳したものは、日本語の本であって英語の本ではありません。したがって、読むのは日本語であり英語は関係ありません。日本人の書いた日本語の小説を読んで、良い文章だと思うならば、それはその人にとってよい日本語であるわけです。翻訳もまったく同じことだと思います。よい日本語かどうかは読む人によって、当然、異なってきます。読書歴が豊富で、知的レベルが高く、感性の鋭い人とそうでない人では良し悪しの判断が異なってきます。すると、翻訳を読んで、その出来具合を尋ねても、人それぞれに異なることになります。相対的に言えば、よい翻訳だと言う人が多ければ多いほど、その翻訳はよい翻訳

であろうということになります。しかし、だからと言って、絶対的によい翻訳だと断定することはできません。

このように考えると、翻訳の評価基準として絶対的なものではなく、せいぜい、相対的に良し悪しを言うことができる程度のものです。翻訳書の内容と、それを表現する日本語がよく合っていて、読み手が抵抗なく日本語を楽しむことができるのであれば、それはよい翻訳ということになります。

15 日本語の勢いに乗る

英語から日本語に訳された文は、当然のことながら日本語です。したがって、日本語の支配下に入っているのも、日本語の勢いに乗っていかなければなりません。たとえば、「病気」という日本語を使えば、「病気になる」、「病気を患う」が自然に出てきます。Have something wrong with one's eyes は、「目の具合が何だか悪い」、「目の調子がおかしい」が文字通りの意味です。Have trouble with one's eyes は、「目に問題がある」、「目が面倒なことになっている」という意味です。本来はこのような訳をすべきですが、前後関係から「目の病気」のことが問題になっていることが明白な時には「目の病気」という訳語にする方がよい場合もあります。「目の病気」という日本語を使ったなら、その勢いに乗って、「目の病気を患う」とする方がはっきりします。英語には idiom というものがあり、一般には「慣用句」と訳されています。しかし、idiom には「英語らしい英語」という意味もあります。当然、日本語にも idiom があり、「日本語らしい日本語」という意味です。「病気」と言えば「かかる」、「患う」が出て来きます。広い意味で言えば、これは日本語の idiom と考えることができます。Idiom には日本語の流れをつくる勢いがあるので、この勢いに乗っていくことが大切です。英語の表現がどのようになっていようとも、「病気」という日本語を選択したことにより、「かかる」、「患う」という表現を使わざるを得ないことがあります。日本語の勢いに乗りきれないと、「翻訳」に違和感が出て来てしまうことがあります。「病気」という日本語を使ったら、いついかなる時にも「かかる」、「患う」としなければならぬということを言っているではありません。日本語の勢いに乗る方がよい時には、しっかりと乗らなければならぬということです。乗るのか乗らないのかの判断は訳者が、その都度、行なうべきことです。英語に引きずられて、日本語の勢いに乗れずにいる訳語に出合うことが多いような気がします。これと言って間違った訳をしているわけではないのに、違和感がある時には乗り切れていないことが原因の1つかもしれません。

16 耳で聞いてわかる日本語

どのような日本語訳がよいかという問題に関しては、様々な意見があると思いますが、私自身は耳で聞いてわかる日本語にすべきであると考えています。訳の対象となる分野によって日本語が異なることは当然ですが、ごく普通のものであれば、耳で聞いてわかる日本語にするのがよいと考えています。翻訳に限らず、文章というものは耳で聞いてわかるものにするのがよいと思います。耳で聞いてわかる日本語は適度の休止がある文で、読む時に息苦しくない文です。句読点が適切であり、一息で読める範囲が1つのイメージを作るような文章です。英語の文には、たとえば、関係代名詞のように文を長くすることに長じた語があります。ピリオドまでは句点を打たないという主義を貫こうとすると文章はどこまでも長くなります。すると、だらだらといつまでも文章が長く引きずられて、切れ味がなくなり、そのために意味も理解しづらくなります。読むのに息苦しくない文、気持ちよく聞ける文章にするのがよいと私は考えています。複雑で長い文章を書く人がいますが、感心しません。長い文章がなぜよくないかと言えば、リズムができにくいからです。文章を書く時にも、聞く時にも一定のリズムがあり、リズムに乗らないと文章を理解することができません。1文だけならなんとかついていけますが、翻訳などになると相当量の文章を読まざるをえないのであり、最後まで読むためには一定のリズムが必要です。となく、長い文章はリズムができにくい傾向にあります。長い文章であっても、読点を上手く使い、その間にリズムが生まれていけばよいのですが、これは案外むずかしい作業になります。リズムがないと気持ちよく息継ぎができないので理解しづらい文になります。私は耳で聞いてわかる文章であることを基本としています。そのためには、自分の書いた文章を耳で聞いてみるのがよいです。今ではかなり質の良い読み上げソフトがありますので、コンピュータ上で読み上げてもらうようにしています。

17 聞いたことのある日本語

翻訳するときに使える日本語は、これまでに読んだり聞いたりして身につけている日本語だけです。これは至極当然なことです。では、翻訳をするときに、この自明の理を守るかと言えば、必ずしもそうではありません。色々な折に学生に英文和訳をしてもらいますが、もっとも気になることの1つに、訳をする人がこれまでに読んだこともなく、聞いたこともないと思われるような日本語を訳語として使う場合がよくあります。語のレベルでも文のレベルでも起こります。原因を考えてみると、英語の語彙や構造に飲み込まれていて、日本語へ

の脱皮ができていないことにあります。英語から脱皮して日本語に成り変わらなければならないのに、それが中途半端な時に起こるように思います。翻訳対象となる英語を訳者の身についた日本語だけでカバーしきれないことがあります。これはどのような翻訳者にとっても起こり得ることです。とくに翻訳対象となるジャンルが、訳者が得意とするジャンルと異なる場合に起こります。このような状況にどのように対処したらよいのでしょうか。英和辞典で語の意味を調べて置き換えるのですが、単純に置き換えると不自然な日本語になり、意味が通らないことが起こります。あるいは意味が通っていても、その意味自体を翻訳者が理解できていないことがあります。このような場合には、その語の意味が身についていないので、自然な日本語にならない危険があります。これらの語に関しては、訳を行なっているその場で、身についた日本語のレベルまで引き上げることが必要になります。身につけている日本語の量には限りがありますので、すべての英語に対応できるとは限りません。訳をしながら、その都度、身についた日本語の中に組み込んでいく必要があります。時間がかかりますが、この作業を行なわないと、内容の理解ができませんので、よい日本語にすることもできません。

翻訳をするときには読んだり聞いたりした日本語以外は使わないようにすべきだと思います。日本語の語彙が足りない場合にはよく調べて、よく考えて身につけてから、実際の訳文を作ることが絶対に必要ではないかと思います。簡単に言えば、訳者の体を通さない日本語は使ってはならないということです。体を通さずに英和辞典から拾って来たものを張り付けるようなことをしてはならないと思います。これを実践することはそれほど簡単なことではありませんが、この姿勢は最後まで貫いていかなければなりません。

18 スピード

英文和訳、翻訳をやる時に、訳をつけるスピードは重要な要素であると考えています。1ページの訳を30分でやる人もいれば、3時間かかる人もいれば、3日かかる人もいると思います。訳す対象となる英語にもよりますので、1ページにかかる時間を絶対的に定めることはできません。訳す人の英語力や知識の量など様々な要素が絡んできますので、時間は相対的にしか決められません。したがって、1ページにかかる時間を設定することには意味がありません。しかし、翻訳をやる時にもある程度のスピード感が重要です。非常にゆっくりだと、なかなかリズムに乗れません。辞書と首っ引きでは訳しているのか辞書を引いているのかがわからなくなります。これでは英文の雰囲気を感じながらの

訳はできません。あまりにも時間がかかると、なかなか進まないのでも訳をやっ
ていて楽しくありません。1 ページに3 時間もかけていると、200 ページくら
いのものを訳するのに600 時間がかかります。これは集中するにはあまりにも長
い時間です。訳をやる時に、一番重要なことは自分自身に訳を楽しんでいる感
覚があるかどうかということです。楽しさを感じるためには進むことが必要で
す。楽しさを感じることができれば、一定のスピード、ほどよいスピードがあ
ることになります。あまりにも時間がかかるということは、そもそも、訳をや
るような環境にないということの意味します。英語力が不十分である。書いて
ある内容が理解できていない。書かれていることに興味が持てない。日本語力
が不足している。これらの要素を1 つ満たすごとに楽しさが減少して、スピー
ドが落ちてきます。

19 おわりに

英語を日本語に訳すためには英語がよく理解できていなければなりません。
そして、英語の意味を正確な日本語に置き換えることができなければなりませ
ん。英語の文構造や情報構造がわかるだけでは不十分で、文化や歴史について
も知らなければなりません。英語に関連するすべてのことを知らなければなり
ません。同様に日本語についても、文構造や情報構造に関する知識があるだけ
では不十分で、日本語に関連するすべてのことを知らなければなりません。英
語力、日本語力という限られた能力ではなく、英語力や日本語力の外側に広が
るあらゆることに関する知識と理解がなければなりません。そして、これら
を満たすだけではまだ不十分であって、その上にこれらの事柄を統一する感性と
分別が必要ではないかと思います。英文和訳や翻訳は、訳者の持てるものをす
べて動員した総力戦だと私は思うのですが、皆さんはどのようにお考えでしょ
うか。